

第5回 ニッケピュアハート エッセー大賞

<中学の部 優秀賞>

私とブルーベリー

玉井杏

ブルーベリーの鉢植えを、父の友人で、園芸家のくさにわさんからもらいました。そのことなんて、全く忘れていたある夏の朝、ヨーグルトに小粒のブルーベリーがのっていたのです。「あのブルーベリーが実をつけたのよ。」

母は、自慢気に言いました。そういえば、母が毎日せつせと水やりをしていたような…。紅葉と落葉を経て、春には、スズランの花に似たかわいらしい白い花が咲き、ついに、実をつけたという。

「そろそろ、ひとまわり大きな鉢に植え替えないとね。」

「えっ、もう実ったのに。」

とつぶやくと、くさにわさんから聞いたことを話してくれました。

「実のなる木っていうのはね、小さな鉢で育てられると、そこだけが自分の世界だと勘違いするの。根が早く鉢の壁に届くことで、もう自分は大人になったんだと思ってしまう。まだ枝が育ちきらないうちに実をつけるから、小さなちょっとの実しか収穫できないのよ。そこで、広い土地に植え替えてあげると、まだ自分が子どもなんだって気付いて実をつけなくなるの。そして、数年かけて成長して、自分が大人になったと感じたときには、大きな実を沢山つけるんだよ。」

この話を聞いて、数日前の私の言葉が、頭をよぎりました。

「もう一人で生きていけるから。」

こんなことを言ってしまった私は、ブルーベリーと同じで、ちっぽけで未熟な実なのです。私にとって、ひとまわり大きな鉢は、高校かもしれない。そして、大学、社会へと広がっていく。あんなに小さな酸っぱい実でも嬉しそうな母は、大きな美味しい実をつけたら、飛び上がって喜ぶことでしょう。ゆっくり、じっくり成長していこう、ブルーベリーといっしょに。